

令和元年度第2回小学校ゼミナール議事録

2019年度8月2日(金)

於：広島大学附属小学校

司会者・発表者：長江優衣・迫田彩・松尾勇希（広島大学教育学研究科院生），八島恵美・結城和夏・中林玲奈（広島大学附属小学校教諭）

参加者：影山和也（広島大学准教授），八島恵美（広島大学附属小学校教諭）他10名

1. 協議の概要

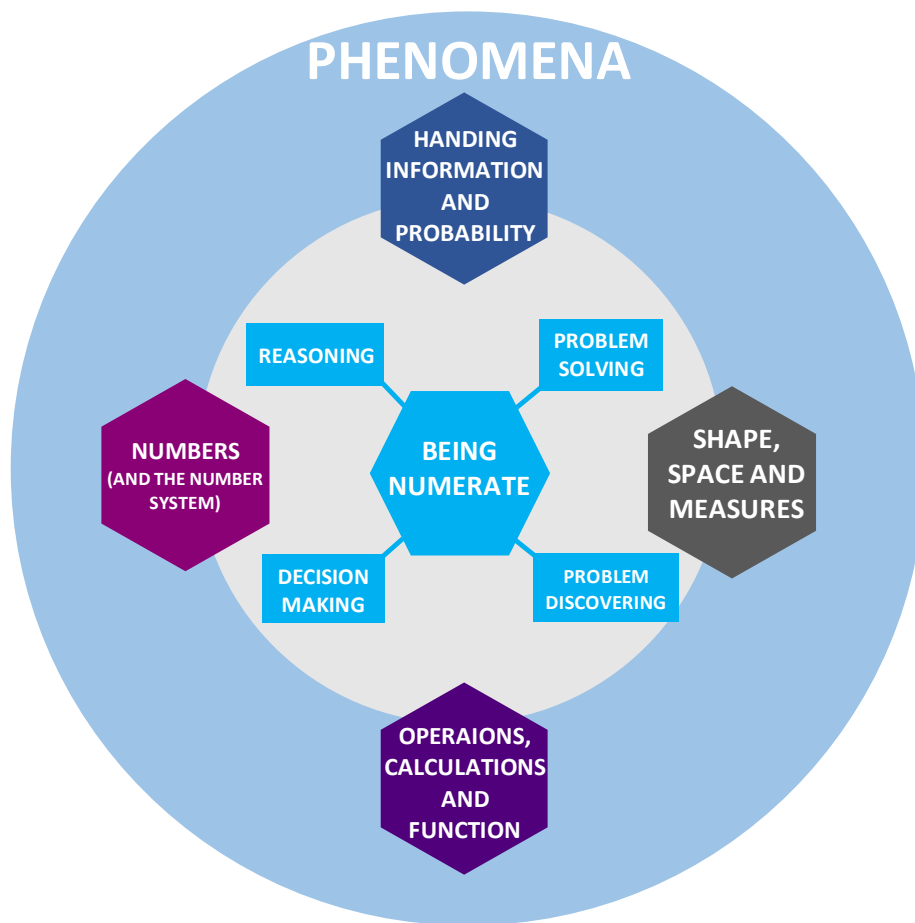
今回は、SDGsと算数科の関連性という観点で発表及び協議が行われた。SDG4「質の高い教育をみんなに」に掲げられた10個のターゲットの中に算数と関係が深いものとして「ニューメラシー(numeracy)」というキーワードがある。これを受けて今回は「ニューメラシー」を中心に考察を行った。

2. 協議の実際と質疑の要約

はじめに、院生からニューメラシーの定義やSDGsとの関連について発表が行われた。イギリスとオーストラリアのニューメラシーの定義やニューメラシーテスト(NAPLAN)を基に「ニューメラシー」という語の捉えが提示された。しかし、算数・数学教育研究においてニューメラシーの定義は画一的なものではない上に、イギリスの定義では「数学的リテラシー」と同義であるとしている。また、日本ではかつて「数感覚」という言葉で研究されていたが、現在のニューメラシーの意味は以前よりも広がってきている。そのため、今の時代に合ったニューメラシーを考えるべきだという意見から、SDGsで求められるニューメラシーを考える運びとなった。イギリスのニューメラシーの捉えを基に「関数」や「確率」を領域として追加し、外枠として「現象」を考慮したニューメラシーのモデルが構成された(図1)。各要素の包含関係等については今後再検討する必要がある。

続いて附属小の先生方からSDGsと算数科の関わりについての発表が行われた。SDGsの17の目標の中で算数科の教材になり得るものの具体例が示された。2教科以上または総合単元・行事と関連した授業を展開する「コラボ授業」、授業後に生徒が気づいたことや感想等の学習記録を残す「SDGs手帳」といった具体案が示された。SDGsと算数科の関わりを検討する際に、「知識及び技能」の観点のみで考えるのではなく、学習指導要領の三つの柱を基に「思考力、判断力、表現力」等の観点から見る必要があるという意見が出された。また、SDGsはもちろん、ニューメラシーは算数・数学科だけで担当するものではないため、教科横断的な視点で見ていく必要性についても共有された。

(文責：吉岡国晃)



☒ 1 Numeracy for SDGs